

翻訳と文法的比喩: 名詞化再考

Translation and Grammatical Metaphor: Nominalization Revisited

長沼美香子

立教大学

Abstract

This paper will revisit nominalization in Japanese-English translation from the systemic functional perspective. Nominalization has been a recurring topic among Japanese translators as well as grammarians, especially since the 1970s. They posit that this issue is attributable to a language typology based on different ways of thinking between Japanese and English: the former is a verb-oriented language and the latter noun-oriented. It is true that a number of Japanese (abstract) nouns were borrowed from Chinese in ancient times or coined for the sake of translating foreign languages, including Dutch and then English, in more modern times. Therefore, nominalized expressions are likely to sound somehow foreign per se, in particular when placed as a point of departure or a theme in the clause. Having said that, translation is a process mediated by the translator so that unpacking of nominalization is also presumed to be a result of understanding or interpreting of the translator, irrespective of ST-TT language combinations. This paper attempts to examine functionally the phenomenon of nominalization as a grammatical metaphor in relation to lexical density and textual meaning.

1. はじめに

本稿は「文法的比喩 (grammatical metaphor)」というハリデーの提唱した概念に着目して、日本語 - 英語間の翻訳に関する起点テキスト (source text: ST) と目標テキスト (target text: TT) の分析へと適用することで、1970年代以降の日本の翻訳論における通説を機能言語学的に再考する可能性を探る。本論に入る前にまず、以下の引用から始めたい。エドワード・W・サイード著『知識人とは何か』(原題は *Representations of the Intellectual*) の「訳者あとがき」のなかで、翻訳者(大橋洋一)が邦訳のタイトルを解題している部分である(pp. 203-204)。

原題をそのまま翻訳すれば「知識人のレプリゼンテーションズ (Representations)」となるが、<レプリゼンテーションズ>という言葉は、その多義性のために翻訳がむづかしい。<レプリゼンテーションズ>を、知識人のもつイメージ/表象と考えると<知識人の表象>でいいかもしれないが、<レプリゼンテーション>には、代弁とか代理さらに

主張や表現という意味もあって、〈知識人の代弁／主張〉と考えることもできる。また「知識人の」という場合、知識人を表象したり代弁したりするとも、あるいは知識人が表象したり代弁したりするとも、両方にとれてしまう……。本書で「知識人とは何か」を標題として採用したのは、知識人とは何か（知識人の表象）と、知識人が代弁し主張することとは同じであるという前提に立ったからである。この邦題は、次善の策かもしれない。だが本書の内容を裏切ることはないと確信している。

ここで翻訳者は、「知識人」と「レプリゼンテーションズ」という二つの名詞の関係性が曖昧であることに戸惑いながらも、みずからの理解と解釈に基づいて、この関係性を訳出しようとした試みを述懐している。結果として、‘representations of the intellectual’ という名詞群 (nominal group) が、「知識人とは何か」という節 (clause) として訳出された。

翻訳という行為は、ある言語から他の言語への単純な言語的転移ではなく、様々な要因が介在する営為である。そのなかで翻訳者の理解や解釈は重要な介在要因であり、それは社会文化的及び歴史的にも広く影響を受ける。本稿は文化や状況のコンテキストに包摂される談話意味がどのような語彙文法によって具現されているのか、という選択体系機能言語学的分析を援用する。

2. 文法的比喩と名詞化

選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics: SFL) では、名詞化 (nominalization) は「文法的比喩を作り出す最も強力な語彙文法資源」(Halliday, 1994, p. 352) として論じられる。文法的比喩という概念は、1980年代に初めてハリデー (Halliday, 1985) によって提唱された。これは語彙メタファー (lexical metaphor) を補完する比喩のタイプであり、SFLでは観念構成的 (ideational) と対人的 (interpersonal) な文法的比喩を区別し、名詞化は前者に関係する。どちらも談話意味と語彙文法との層化 (stratification) における具現関係から比喩が考えられている。ハリデーは、メタファー (隠喩)・メトニミー (換喩)・シネクドキ (提喩) という通常の「修辭的転移 (rhetorical transference)」や「文彩 (figure of speech)」も説明しながら、新しいタイプのメタファーとして、文法的比喩を紹介した (Halliday, 1985, p. 321)。

コンテキストに包摂されたテキストにおいて、意味は語彙文法に具現される。SFLはこのような層化の記号体系モデルを考える(図1)。SFLにおいて層化された言語モデルでは、語彙のメタファーはいわば「下から (from below)」の観点である。つまり、ある語彙項目に対して、字義通りの意味と比喩的意味を区別する。それに対して、文法的比喩は「上から (from above)」の観点を取る。意味から出発して、それを異なる方法で具現する表現に目を向ける。そして、この角度から見るということは、比喩的とは「意味の表現における変種 (variation in the expression of meaning)」(Halliday, 1985, p. 321)と定義される。「上から」の見方ということの主たる特徴は、所与の意味を表現する変種として比喩を定義することになる。

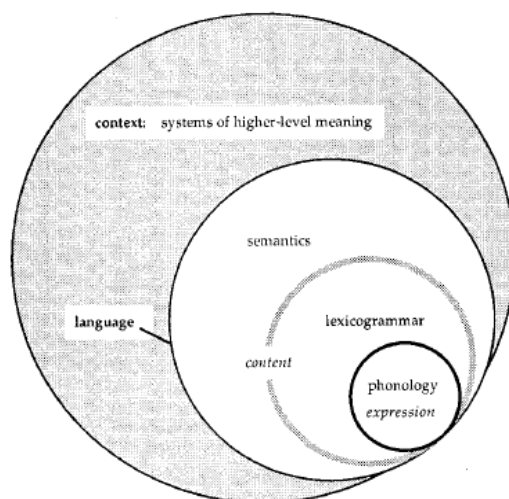


図 1: 層化モデル (Matthiessen, 1993, p. 25)

語彙と文法に関する比喩についての二つの見方として「下から」と「上から」という説明は、あまり聞きなれないので、わかり難いかもしれない。この説明を補足するために、ハリデー (Halliday, 1994) からの例 (flood/many people) を用いれば、以下のように「下から」と「上から」が具体的に図示される (図 2)。
 ‘flood’ (洪水) という語彙項目は、字義通りには「どっと動く水」であり、比喩的には「どっと動く感情や弁舌」である。それに対して、「大勢の人々 (が抗議した)」という出来事の意味は、比喩的ではない「一致した (congruent)」表現では「多数の (抗議)」であり、それが比喩的には「(抗議の) 洪水」となる。

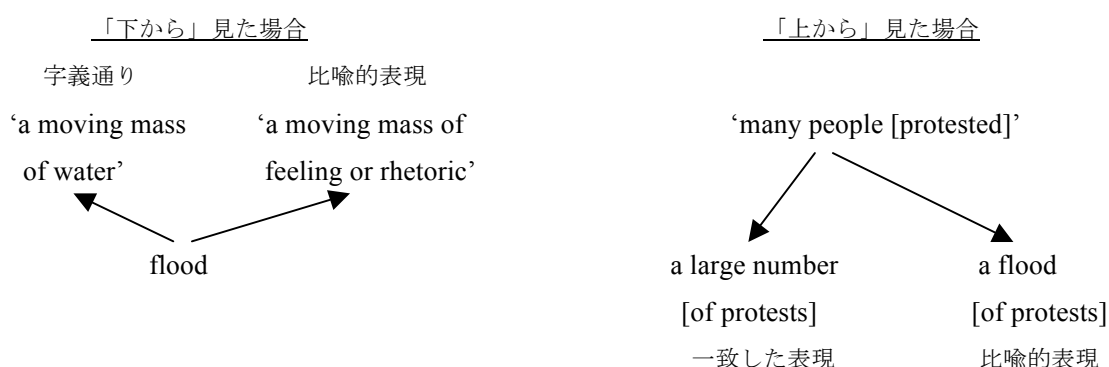


図 2: 比喩に関する「下から」と「上から」の見方 (Halliday, 1994, p. 342 より)

このような意味と語彙文法との層化という関係は、これまで二項対立で論じられてきた直訳と自由訳という対比 (literal vs. free) を再考する上でも有効かもしれない。すなわち、自由訳 (free translation) とは、「上から」の見方をしていることになる。意味から語彙文法を選択するのである。この場合は、起点テキストの比喩的な表現を目標テキストでは比

喩的でない語彙文法資源で具現化するという余地を残すし、その逆もある。まず意味の等価を求めて、語彙文法が選択されるのだ。それに対して、いわゆる直訳 (literal translation) では、まず等価と仮定される語彙文法を選択して「下から」意味を求めるのである。

ところでハリデー (Halliday, 1994, p. 353) は、文法的比喩で名詞化されると何らかの情報が失われるとして、次のように説明する。例えば、‘alcohol impairment’ の「分類詞+物」という構造は、‘alcohol impairs’ (alcohol が行為者) もしくは‘alcohol is impaired’ (alcohol が対象) のどちらの可能性もあり、意味が明確ではない。そのため、名詞化の解釈では曖昧性が残る。そして、内容を解釈したり理解したりできる者とできない者という対立から、背景知識などを有する専門家とそうでない者が、テキストへのアクセスにおいて区別されるとする。

さらにハリデーとマティスン (Halliday and Matthiessen, 1999, p. 7) は、意味カテゴリーと文法カテゴリーの間のマッピングが異なるという点から、以下のような一連の同属関係 (agnation) が存在すると述べる (番号は引用者)。

1. alcohol's dulling effect on the brain
2. alcohol has a dulling effect on the brain
3. alcohol has the effect of dulling the brain
4. alcohol affects the brain by dulling it
5. the effect of alcohol is to dull the brain
6. the effect of alcohol is to make the brain dull
7. if one takes/drinks alcohol it makes the brain dull
8. if one takes/drinks alcohol the/one's brain becomes dull &c.

上記 1 から 8 に進むにつれて、文法的比喩の名詞化が次第にほどかれていくのだが、8 では節複合 (clause complex) で具現されている意味内容が、1 では名詞化によって凝縮されている。名詞群は節や節複合と比較して様々な点で異なる。繰り返しになるが意味の曖昧性もそのひとつである。別の例を引用すれば、ハリデー (Halliday, 2004, p.13) は、‘animal protection’ という名詞群に対して、次の五つの意味が想定できるとする。

- How animals are protected or should be protected by humans
- How we protect or should protect ourselves from animals
- How animals protect other things such as humans or the environment
- How animals protect themselves
- How people use animals to protect themselves

‘animal protection’から上記のような変種ができるのは、この名詞群を節にほどく際に、観念構成的メタ機能において、参与要素 (participant) となる‘animal’と過程中核部 (process) となる‘protect’の関係が不明瞭で、解釈の余地が生まれるからである。また、名詞群では対

人的メタ機能において定性要素 (finite element) がないために、命題内容の議論をすることができない (このまま疑問文や否定文にして、言語的相互行為をすることが不可)。しかし名詞群は同時にまた、テキスト形成的メタ機能の点からは、主題として節頭に位置して出発点となり、新情報を題述に加えてテキストの展開に関与することができるという機能も備えることになる。名詞化によって旧情報から新情報へと知識を蓄積して主題を展開するテキスト・タイプの典型は、科学技術や法律などの専門的で抽象性の高い内容を含む分野である。この点では、文法的比喩としての名詞化は翻訳とテキスト・タイプの問題にもつながる。また日本語においては、漢語や外来語が多用されるテキストが、なぜ「難解」であるのかという理由とも深く関係する。

このような文法的比喩の諸特徴は、翻訳者が介在する訳出プロセスにおいて、どのようなシフトを被るのであろうか。また、そのようなシフトは何を物語るのであろうか。さらに、翻訳されたテキストがより明示化されるという傾向とどのような関係があるのだろうか。テキストを分析する際には、レジスター (言語使用域) も考慮に入れる必要がある。それは、起点テキストと目標テキストは、異なるコンテキストに属する読者に向けられているからである。レジスターには、活動領域・役割関係・伝達様式の三つの変数があるが、送り手 (著者/翻訳者) と受け手 (翻訳者/読者) の関係は役割関係に影響するだろう。同一言語内での専門家と素人という対立とは別に、異言語間における文化や状況のコンテキストの内部者と外部者という対立が生まれる。したがって文法的比喩が訳出プロセスを経ると、何らかのシフトが起こる可能性が大きいと思われる。

3. レジスターと語彙密度

ハティムとマンデイ (Hatim and Munday, 2004) は、翻訳におけるテキスト・レジスター (text register) を取り上げる。両者によると、レジスター理論は翻訳と言語学との相互作用を理解する上で重要であり、レジスター分析が言語学や翻訳学に及ぼした影響は大きく、レジスターという概念は幾多の変遷を経て、新たな洞察を取り込んできた。そして両者は次のような疑問を投げかける。ある特定の状況において、ある種の言語使用が適切であるか否かの判断基準は、何であろうか。そのような適切性への反応は、どのようにテキスト的能力 (textual competence) を形成するのだろうか。コミュニケーションの変数 (communicative variables) への気づきは、プロの通訳者や翻訳者がテキストの豊かな多様性に対処する上で、どのように役立ち、またこれらは教えることが可能であろうか。このような問いをレジスターは挑発すると論じている (p. 187)。

レジスターという概念の原初的な定義は、ハリデー他 (Halliday, McIntosh, and Stevens, 1964) に依拠できる。つまり「言語使用者による変種が方言 (DIALECT)、言語使用による変種がレジスター (REGISTER) である」。ここでは言語使用の変種としての概念をレジスターとしている。レジスターは「言語使用域」であり、言語使用の多様なコンテキストにおいて、異なる状況に適切であるようにと選択される。これは次のように説明できる。

The category of ‘register’ is needed when we want to account for what people do with their language. When we observe language activity in the various contexts in which it takes place, we find differences in the type of language selected as appropriate to different types of situation.

(Halliday, McIntosh, and Stevens, 1964, p. 87)

文法的比喩の出現頻度はレジスターによっても異なり、テキスト固有の複雑性と関係する。SFLでのレジスターには三つの変数と関係するので、何を誰にどのように伝えるのという状況のコンテキスト次第で異なるレジスターが具現される。したがってレジスターは、いわゆるテキスト・タイプを言語体系の側から考えた概念とも考えられる。コンテキストの形相 (context configuration: CC) と言語使用の変種の包括的な関係をマティスン (Matthiessen, 1993, p. 237) は、次のように図示する (ftm = field, tenor, mode) (図 3)。

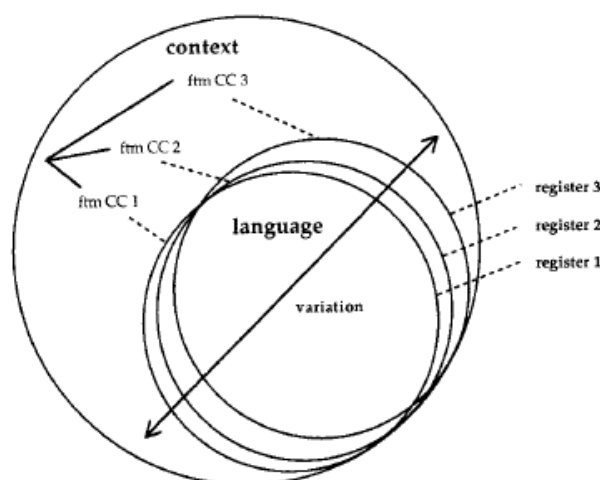


図 3 : コンテキストとレジスター (Matthiessen, 1993, p. 237)

音声言語と文字言語では変数のひとつである伝達様式が異なるので、同一命題を同一人物に伝える場合にも、異なるレジスターが前提となる。ハリデー (Halliday, 1994, p. 552) は、語彙密度 (lexical density) と文法的錯綜性 (grammatical intricacy) を対比させて、前者が増加することによる複雑性を文語体 (書き言葉らしさ) の特色とし、後者が増加することによる複雑性を口語体 (話し言葉らしさ) の特色と指摘する。語彙密度が増加する主な要因は、節数の減少と、機能語 (function words) に対する内容語 (content words) の増加であり、文法的錯綜性が増加する要因はその逆である (語彙密度の代表的な計算方法は、内容語の数を節の数で割る)。名詞化を多用して情報を凝縮すれば語彙密度が増すことから、語彙密度と文法的比喩には高い相関性があるといえる。文法的比喩は、個体発生的には子どもよりも大人の言語使用の特色であり、系統発生的には西洋近代以降の科学ディスコースが典型的である。このようなレジスターにおいては、旧情報として蓄積された知識を出

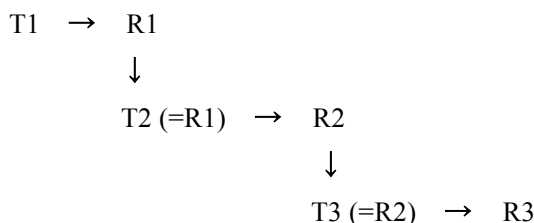
発点としながら、新情報を加えてテキストを展開するという機能が肝要である。この点で、異なる言語へとテキストを翻訳する際に、命題の意味内容のみではなく、レジスターに固有のテキスト形成的意味にも配慮する必要がある。

4. テキストの展開

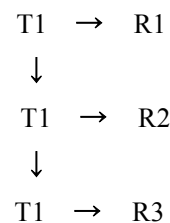
三つのメタ機能（観念構成的・対人的・テキスト形成的）は同時に具現されるが、テキスト形成的（textual）メタ機能は得てして見過ごされやすい。文法的比喩である名詞化という現象はテキスト形成的にも興味深い影響を及ぼす。それは、動詞的に具現されていた出来事が名詞化されると、参与要素となり、節の始まりの位置で主題の機能を担う余地がもたらされるからである。何が主題の位置に来るのかという点は、テキストがどのように展開するのかということにつながり、主題構造や情報構造と密接に関係する。

テキストの展開については、ダネッシュ（Daneš, 1974）のよく知られた次の3パターンがある。ダネッシュによれば、(1) のリニアな展開が最も基本的なパターンであり、題述が次の主題となってテキストが展開していく。(2) は同一もしくは類似の主題が連続し、それらに対して異なる題述が情報を追加する。(3) では、まず「ハイパー主題 (hypertheme)」が提示され、そこから個別の主題が派生する (pp. 118-119)。

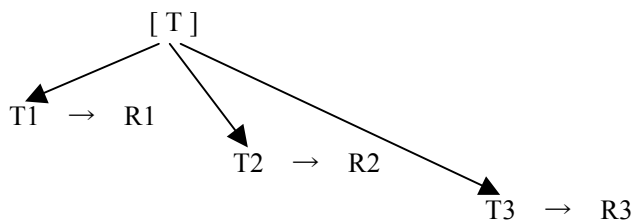
(1) リニアな主題展開



(2) 連続した主題展開



(3) 派生した主題展開



翻訳者は起点テキストにおける主題展開のパターンを理解して、目標テキストにおいてもテキスト形成的な等価を意識する必要があるといえる。SFL では主題構造と情報構造は別であると考えるが、無標的には主題が旧情報を担う場合も多いので、全く無関係というわけではない。特に (1) のように題述が次の主題となるような場合は、いわゆる原文の語

順に逆らった訳出をすると、旧情報から新情報へという情報伝達の無標のパターン（自然な流れ）を乱すことになり、目標テキストの読み手の理解を混乱させてしまう。また (2) のようなパターンでは、主題の反復を行う際に、照応や代用あるいは省略という結束装置のどれを用いるのかは、言語による差異や嗜好性も考慮せねばならない。(3) のように個別の主題が派生的に後続の節で用いられる場合には、ハイパー主題での内容をいくつかの名詞化によって主題として抽出する必要もある。

このようなパターンが組み合わされて、テキスト形成的意味が具現され、他の二つの意味（観念構成的意味と対人的意味）がテキストとして構成される。そして、英語の叙述法における無標の主題は名詞（群）から成る主語であるので、テキスト形成的メタ機能に貢献する主題の展開という観点からも、名詞化という文法的比喩は重要な役割を果たす概念となる。

5. 文法的比喩と翻訳

翻訳研究において文法的比喩を取り上げた研究は非常に限られている。しかし、文法的比喩の問題は、言語学的知見からの翻訳研究がセンテンスをこえて、テキスト・タイプやレジスター、コンテキストのレベルへと移行する可能性を広げる。さらに翻訳者の可視性（Venuti, 2008 参照）という点からも、文法的比喩に着目すれば、翻訳者の意思決定の痕跡を見出すことができる。例えば E. スタイナー（Erich Steiner, 2002）は、翻訳の起点テキスト／目標テキスト、同一言語のオリジナル・テキスト／翻訳テキストの組み合わせを比較しているが、コーパスベースの研究に依拠して、翻訳におけるテキスト的特性を文法的比喩と語彙密度という点から分析する。スタイナーの事例は英語とドイツ語の組み合わせであるが、翻訳されたテキストの特色は、少なくとも三点（「類型的要素」「レジスター」「訳出プロセスの特性」）から説明できると指摘する。そして特に訳出プロセスの特性として、翻訳者の「理解」と文法的比喩の「解凍（unpacking）」の関係に着目した仮説を立てる（p. 214）。翻訳テキストでは語彙密度が低減するのは、文法的比喩がほどかれるからであり、それは訳出プロセスで翻訳者の理解を通して、名詞が動詞へと品詞転換されるためであるとする。

この視点は、言語の組み合わせにかかわらず有効であろう。例えば、次のような日本語から英語への訳出例はどうであろうか。

[ST] 改正被災者生活再建支援法

[TT] the Revised Law to Provide Assistance for the Recovery of the Livelihoods of those Affected by Disasters

これは、平成 20 年 1 月 18 日に発表された「169 回国会における福田内閣総理大臣の施政方針演説」からの一例であるが、日本語 ST のコンパクトな名詞群の「改正被災者生活再建支援法」に対して、英語 TT をバックトランスレーションすれば、「災害を被った人々

の生活の再建のために支援を提供するための改正法」となる。機能語を追加して改正法の内容を解釈しないと、このような訳出はできない。このシフトは、翻訳者の理解や解釈なしにはあり得ない（つまり、名詞化の機械的な解凍は不可能）。また、訳出プロセスを経た結果としての明示化傾向ともつながる。この起点テキストは政治演説であるが、書かれた原稿を首相が口頭で読んだものである。ちなみに上記の例以外にも、官僚的レジスターの典型ともいえる「透明化」「少子化」「本格化」「具体化」「法制化」「簡素化」など「～化」や、「中立性」「利便性」「持続可能性」「競争性」「実効性」など「～性」という表現に代表される名詞化の多用も、このテキスト全体の特徴である。

6. 日本語の欧文脈と抽象名詞

1970年代以降に散見されるわが国の翻訳論を限定的に概観する前に、日本語の抽象名詞と関係の深い欧文脈について触れておきたい。森岡（1999）は、明治から大正にかけての日本語に欧文脈が定着したという背景において、抽象名詞の用法を具体例とともに列挙している。しかし意外なことに、明治初期の翻訳では「洗練されていない直訳より、正統の漢文体か親しみのある和文体で表現することこそ、翻訳者の手柄」という面が考えられていたとしており、翻訳自体にいわゆる「翻訳調（translationese）」とされる欧文脈が出現するのは大正末期ごろからであると指摘する。抽象名詞の用法は、無生物主語とも重なる欧文脈を形成するが、「日本人の文章のうち、自分自身で書いたオリジナルな文章に、まず直訳語脈すなわち欧文脈が現れ、時を経てこれらの新しい語法・措辞が社会に受け入れられた段階で、翻訳の文章にも用いられるようになった」と述べる（森岡, 1999, p. 147）。欧文脈の出現が翻訳からの影響というよりは、むしろ翻訳に影響を及ぼしたという一種のパラドックスである。欧文脈は、翻訳書ではなく英語リーダー（教本）に現れた用法であるとして、森岡は以下のように説明する。

抽象名詞・無生物名詞が主語となって、有情の者であるかのごとくふるまったり、有情の者に働きかけたり、擬人的な行動をしたり、警句に用いたりすることは、日本人の発想にはなく、日本の文章にはそのような語法・措辞はほとんど見られなかった。ところが、英語リーダーの直訳には、これらの用法が実に頻繁に現れる。

（森岡, 1999, p. 146）

このように森岡の指摘では、抽象名詞などを主語とするテキストの展開は、「日本人の発想」ではないが、英語学習書における「直訳」（文法訳読）では高い頻度で出現するとしている。ここで「発想」という言葉が使用されるが、それが何であるのかを森岡は明確に定義していない。そもそも抽象名詞自体が、翻訳語もしくは漢語由来の新しい名詞の場合も多い。語彙そのものがなかったということは、そのような抽象名詞が使用される文化や状況のコンテキストもなく、したがってレジスターも存在しなかったことになる。したがって、「発想」とは微妙に別次元の背景があったとも想定できる。

7. 名詞化と日本の翻訳論

安井 (2008, p. 180) は文法的比喩を論ずるなかで翻訳にも言及し、英語を日本語に翻訳した場合に通常、訳文が長くなる原因として、日本語では文法的比喩の比率が低いことを指摘する。このため、英語での文法的比喩を日本語へ翻訳しようとしても対応物が見つからず、結果として「一致した形、または整合形 (congruent)」に「解きほぐす、または解凍する」ために、翻訳された日本語の方が長くなるとしている。しかし、訳文が原文よりも長くなるのは、英語から日本語への翻訳に限った現象ではなく、翻訳の普遍的特性 (translation universals) であることを、安井は見逃している。この普遍的特性というはベーカー (Baker, 1993) の提唱した概念である。もっとも、このような特性も、字幕翻訳やローカリゼーション翻訳など、特殊な目的やスペース上の制約のために、原文よりも短い訳文や同等の長さの訳文を維持することが規範となるような場合には、当てはまらないだろう。ここでもレジスターやテキスト・タイプを考慮に入れる必要がある。

安井の指摘は、主に 1970 年代以降のわが国において、複数の研究者や翻訳理論家が繰り返してきた「英語らしさ」と「日本語らしさ」をめぐる論考と同趣旨とも解釈できる。池上 (1981) の「する言語」と「なる言語」という類別をはじめとして、「英語は名詞構文中心、日本語は動詞構文中心」とする類型論と通底する (安西, 1995; サイデンステッカー・安西, 1983; 平子, 1999; 大野, 1978; 外山, 1973/1987; 柳父, 1979 など多数)。

ところでチェスタマン (Andrew Chesterman) は、フランス語の起点テキストを英語に翻訳した 2 種類のテキストを比較して両者の優劣を評する際に、「英語では、(フランス語に比べて) 動詞形のほうが難解な抽象名詞よりも一般に好まれる」とコメントしている (Chesterman and Wager, 2002, p. 9)。「日本語らしさ」と「英語らしさ」の関係についてのコメントと類似した言説が、「英語らしさ」と「フランス語らしさ」の間にも適用されるようである。しかし、これはむしろ個別の言語間の問題というよりは、翻訳という現象に関する普遍的特性として再考できることを示すのではないだろうか。

本稿では、起点テキストにおいて文法的比喩として名詞化された語彙文法は、翻訳者の解釈によってほどかれて目標テキストへと訳出されるという傾向に注目する。これはまた、訳出プロセスに翻訳者が介在している証左ともいえるし、レジスターによっても左右される、と筆者は考える。このような視点から名詞化を再考するために、まずサイデンステッカーと安西 (1983) が紹介する代表的な言説にそって、日本で論じられてきた名詞化の問題を翻訳論との関連で概観しておこう。外山 (1973/1987) は、翻訳における構文転換の必要性を述べて、次のように説明する。

西欧の言語が名詞中心構文であるのに、日本語は動詞中心の性格がつよい。「この事実の認識が問題の解決に貢献する」というのが名詞構文なら、「これがわかれば問題はざっと解決しやすくなる」とするのが動詞構文である。翻訳においては、語句の翻訳だけでなく、こういう名詞構文→動詞構文の転換も必要である。名詞構文のほうが硬い論理をあらわすのに適している。動詞構文ではそれが十分に移しきれない。動詞構文の論理

はもっと柔かいものだからである。

(外山, 1973/1987, p. 11)

池上 (1981) は、「モノ」と「コト」(「する」と「なる」に対応) という観点から以下のように指摘する。

ある出来事が表現される場合、そこから何らかの個体 (典型的には動作の主体) を取り出し、それに焦点を当てて表現する場合と、そのような個体を特に取り出すことなく、出来事全体として捉えて表現する場合とがある。(中略) 前者が<モノ>指向的な捉え方であるとすれば、後者は<コト>指向的な捉え方と言えよう。

(池上, 1981, pp. 94-95)

柳父 (1979) は、福沢諭吉が翻訳した「アメリカ独立宣言」を分析しながら、名詞と動詞の問題を次のように論ずる。

英文は、名詞をかなめとして文が展開していくが、日本文のかなめは、元来名詞ではない。動詞である。もっと広く言えば、形容詞、形容動詞も含めた用言である。幕末・明治初期の日本の知識人たちは、福沢諭吉に限らず、西洋文を翻訳するとき、日本文のこの自然な構文にのっとりとしていた。[...] まもなく直訳調翻訳の方式が作り出され、急速に定着していった。簡単にいえば、それは名詞中心の日本文である。その名詞の位置に、漢字、やがてカタカナの外来語が設定されていく。

(柳父, 1979, p. 45)

柳父 (1979, p. 47) はまた、「文法学者、時枝誠記は、西欧語は世界をモノとしてとらえるが、日本語はコトとしてとらえる、と語った。日本語文法のコトをつかんだ見解である」とも述べている。

上述したように日本で展開されてきた議論では、英語の名詞構文を日本語では動詞構文にして訳出すると「日本語らしく」という点が強調される。また翻訳論や指南書のみならず英文法の解説書(江川, 1964; 伊藤, 1979 など)でもこのような点は言及されてきた。ここでは翻訳学習者への教科書におけるひとつの典型例から見て行こう。安西徹雄『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』はわが国の翻訳教育において多大な影響力を持つ書籍で、タイトルにもあるように訳出の仕方のポイントを一種のマニュアルとしてまとめている。このなかで安西は、「名詞の中に文を読む」ことを指南する。そして「原文で名詞になっているからといって、訳文でも名詞に訳さなくてはならない理由はどこにもない」として、以下のような例をあげる (安西, 1996, pp. 12-13)。

Distance lends enchantment to the view.

遠くから見れば、景色は魅力的になる。

Years of study of foreign cultures has convinced me that what is really important is to understand one's own.

永年外国の文化を研究してみて確信するにいたったのだが、大事なのは実は自国の文化を理解することなのだ。

(years of study of foreign cultures → after I have studied foreign cultures for many years)

Ignorance of foreign customs can result in unexpected misunderstandings.

外国の習慣を知らないと、思いがけない誤解の生ずることがある。

(ignorance → If we don't know)

そして、このような例から帰結される訳出上の「公式」は、次の手順を踏む。

- (1) 名詞の中に動詞的な意味がふくまれていないかどうかを確かめ、
- (2) もしふくまれていれば、前後関係から主語、目的語などを補って文章の形に読みほどこき、
- (3) 適切な接続詞を補って、訳文にまとめあげる。

最初の例文を「距離は景色に魅惑を貸す」のように訳出すべきでない理由として安西は、「これでは何のことか分からない」とする。そして、‘distance’ という名詞のなかに主語と動詞を読み取り (‘we see a view from a distance’), さらに接続詞 (‘when’) を加えて、節の形に整えるように指導する。これは名詞化をほどく方略であり、翻訳者の理解や解釈を必須とする。そして、この結果として語彙密度は下がる。訳文を英語にバックトランスレーションすれば、‘when we see a view from a distance, it will become more attractive’ などのように節複合となり、内容語の比率が低下するからである (語彙密度は 4 → 2.5)。上記のすべての例においてこのような翻訳のプロセスを経た結果として、起点テキストの名詞群が目標テキストでは節にシフトする。これはまた、主題構造も変容させるが、安西はテキスト・タイプやテキストを包摂するコンテキストには言及しない。したがって、レジスターによる言語使用の相違は一切無視される。

安西の別の著作『英語の発想』では、外山 (1973/1987) や柳父 (1979) に依拠しながら、「英語は名詞中心、日本語は動詞中心」という命題を翻訳実践に生かすために、英語と日本語のまさに「発想」の違いを力説する (安西, 2000, pp. 40-60)。そして具体的な翻訳例として、「アメリカ独立宣言」冒頭の原文を「直訳」したものと福沢諭吉の訳とを比較した柳父の分析を引用している。ここで柳父の著書 (柳父, 1979) で提示されている直訳例を「直訳 1」、安西 (2000) の直訳例を「直訳 2」、福沢諭吉の訳をより逐語的に原文に即したものに改訳した例を「安西訳」、さらに比較対象として政治学者の斉藤真 (1981) からの抜粋を「斉藤訳」として、「福沢訳」と共に以下に併記してみる¹ (「福沢訳」は福沢 (1866) よ

り直接転記)。

[ST]

When in the Course of human events it becomes necessary for one people to dissolve the political bands which have connected them with another, and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them, a decent respect to the opinions of mankind requires that they should declare the causes which impel them to the separation.

[TT]

福沢訳	人生 <small>ジンセイ</small> 已ムヲ得サルノ時運 <small>ジウウン</small> ニテ一族ノ人民他國ノ政治ヲ離レ物理天道ノ自然 <small>ジネン</small> ニ從テ世界中ノ萬國ト同列シ別ニ一國ヲ建ル時ニ至テハ其建國スル所以ノ原因ヲ述ヘ人心ヲ察シテ之ニ布告セサルヲ得ス
直訳 1	人類の諸事件の経過において、一国民が他の国に結び付けられていた政治的な絆を解き放ち、自然法と自然の神の法がその国民に付与した分離した平等の地位を、地上の列強の間で占めることがその国民にとって必要となる時、人類の世論にたいする当然の配慮は、彼らが分離せざるをえなかった理由を宣言すべきであるということを要求する。
直訳 2	人間的事件の経過において、ある国民が、彼らを他の国民に結びつけてきた政治的絆を解消し、地上の諸国のあいだで、自然法と、自然を創った神の法が、彼ら当然の権利として認める、分離した平等の地位を占めることが必要となる時、人類の世論にたいするしかるべき考慮は、彼らを分離に駆り立てる原因を宣言することを要求する。
安西訳	歴史の経過にともなって、ある国民が政治的絆によって他国に併属されてきたことを嫌い、これを解消して、自然および自然を創った神の法に従い、当然の権利として独立し、世界の列強のあいだに伍して平等の地位を占めざるをえなくなった時、人類の輿論にしかるべき敬意をはらうならば、なぜ独立するほかないか、その理由を、ひろく内外に宣言しなければならない。
斉藤訳	人類の歴史において、ある国民がいままで彼らを他国民の下に結びつけていた政治上の束縛をたちきり、地上各国の間であって、自然の法や自然の神の法によって本来当然与えられるべき独立平等の地位を主張しなければならなくなる場合がある。そうした場合、人類の意見をしかるべく尊重しようとするならば、その国民が独立せざるをえなくなった理由を、公けに表明することが必要であろう。

安西（2000）は福沢諭吉の翻訳は「大意」のような意識と断ったうえで、福沢訳の読みやすさの理由として、柳父の次のような指摘を根拠に解説する。

文全体は、いくつかの句に切られ、始めの一句を除いて、他はみな、「離れ」、「同列し」、「至ては」、「述べ」、「得ず」と、動詞、または動詞プラス付属語で終わっている。読者は、動詞が現れたところで、だいたいな意味を語ることばが分り、思考の流れはひと区切りつ

くのである。ひと区切りついた部分は一応前へ預けておいて、その先へ読み進んで行ける。文は、全体としては長いが、読者の頭脳には、この文の長さは決して過重な負担とはならないのである。[...] 西欧文は名詞を中心として展開して行く構造であるのに対して、日本文は用言を中心として展開して行く構造である、と言えよう。

(柳父, 1979, pp. 43-44)

筆者の論点はこのような日本語の一般的嗜好性や言語類型論を否定するものではなく、この現象は別の視点からも再考する価値があるのではないかと考える。まず、名詞構文から動詞構文へのシフトは翻訳者の理解や解釈が介在する訳出行為の結果である。そうであるならば、日本語と英語の組み合わせだけに固有の現象として、類型的な「発想」の問題のみに限定されないだろう。名詞化をほどくという選択は、翻訳の特性としての明示化方略とも関連し、結果としてテキスト形成的メタ機能にも影響する。訳出プロセスは二言語間の単純な一対一対応の置き換えではなく、翻訳者の意思決定による選択体系網である。

そのような訳出プロセスでどのような選択がなされているのかを機能言語学の視点で分析してみよう。翻訳者の介在がどのようなシフトをもたらしたかという面で、名詞化と語彙密度に注目し、さらに情報の流れという視点から主題の展開を比較してみる。名詞が動詞にほどこれると節数が増加して、語彙密度は減少する。語彙密度の相違はレジスターにも関係するが、その増減は訳出プロセスからも影響を受けると考えられる。上記六つのテキストの節数と内容語数から語彙密度を計算すると、下表の通りである²。

	ST	福沢訳	直訳 1	直訳 2	安西訳	斉藤訳
内容語数 (a)	32	24	34	34	35	31
節数 (b)	3	7 (4)	2	2	10 (4)	4 (3)
語彙密度 (a÷b)	10.7	3.4 (6)	17	17	3.5 (8.8)	7.8 (10.3)

表 1: ST と TT の語彙密度の比較

この事例では、原文自体も語彙密度の高い難解な ST であるが、それを直訳すると日本語はさらに語彙密度が増してしまう結果となった。英語起点テキストは三つの節から構成される。日本語目標テキストでは、「直訳 1」と「直訳 2」の両方とも「～ことが必要となる時、～は～ことを要求する」というように、形式名詞「こと (fact)」を後置した名詞化によって埋め込み節 (embedded clause) を増やした複雑な構造になり、節数が減少した (埋め込み節は通常、節数として数えられない)。例えば「直訳 1」の前半の「こと」は、「[[[[一国民が他の国に結び付けられていた]] 政治的な絆を解き放ち、[[自然法と自然の神の法がその国民に付与した]] 分離した平等の地位を、地上の列強の間で占める]]]」ことが」という、複層的な埋め込み節を含む長い主語となる (埋め込み節を [[]] で示す)。直訳は表面的には原文の語彙文法を忠実に反映させているようでありながら、語彙密度を計算するとそう単純ではないことが明らかとなる。このために、わかりにくい訳文の一因になっていると考えられる。

「福沢訳」と「安西訳」では動詞を多用して節数が増えている。上述の柳父（1979）の指摘のように、動詞でひと区切りをつけ、前に預けて次に進むという解釈もできよう。ただし、前半はそれぞれ「時ニ至テハ」「時」のところで、直訳での「こと」と同様に再統合が必要な埋め込み節であるという見方も可能である³（「斉藤訳」では「場合」が該当する。それぞれの数値を表1の括弧内に示す）。しかし「福沢訳」では埋め込み節が並列である。これは「直訳」での錯綜した構造とは異なり、情報の流れにも無駄がない。「福沢訳」を逐語性という点から改訳した「安西訳」は、結果としての語彙密度は「福沢訳」と大差ないものの、内容語数が増加しており、冗長な説明的傾向にある。

最後の「斉藤訳」は、内容語の逐語的対応と読みやすさのバランスを意識した標準的な訳文である。後半の‘a decent respect to the opinion of mankind’ という名詞化された主題部分は、「そうした場合、人類の意見をしかるべく尊重しようとするならば」と名詞化を解きほぐす形で訳出している。これは「文章の形に読みほどこき」「接続詞を補って」おり、安西が公式化した「マニュアル」通りである。政治学者という立場からの、正確でわかりやすい日本語訳を意識したのかもしれない。しかし、「アメリカ独立宣言」というテキスト固有のレジスターへの配慮が、欠落しているともいえる。とりわけ‘a decent respect to the opinion of mankind’ という主題を「～ならば」という節にした結果、「～ことが必要であろう」と受けており、主題のみでなくモダリティ（modality）もシフトしている。

ここで慎重に議論しなければならないのは、本稿で取り上げた問題が「わかりやすい翻訳」という単純な論点に収斂しないという点だ。名詞化をほどこいて動詞として訳出すると、節数が増加する。したがって語彙密度が減少するが、同時に、主題の展開に影響を与え、文法的錯綜性が増して口語体の特徴が強まる。起点テキストと目標テキストそれぞれに、所与のレジスターに特有の語彙密度や文法的錯綜性を含めたテキストの主題展開がある。また、対人的意味（モダリティなど）も関係する。このような観点から分析すれば、日本語と英語の「発想」の相違のみでなく、文化や状況のコンテキストを具現する多様なレジスター（テキスト・タイプ）と翻訳の特性に関する考察をさらに深めることができるだろう。

8. 結語

日本で出版されている翻訳論のなかに、リフレインのように反復される言説がいくつかある。そのひとつが、日本語と英語の「発想」の違いという視点から、いかに「自然な日本語」を訳文として産出するかという言説である。名詞志向の英語と動詞志向の日本語に注目すれば、「翻訳調」を脱却するための翻訳教育の中心的な課題にもつながるとして、わが国で特に1970年代以降注目されてきたテーマである。しかしながら本稿では、日本語と英語に関する一般的嗜好性や言語類型論に矮小化された論述に疑問を提示する形で、名詞化の諸相を文法的比喩という機能言語学的分析の視点から再考する可能性を模索した。二つの言語間で訳出行為が行なわれる際に、名詞化は多面的で普遍的な翻訳の特性にも関係するために正面から取り上げてみた。

名詞化という文法的比喩表現は、起点テキストと目標テキストの対応やその等価性を評価しようとした場合に、観念構成的メタ機能（いわゆる命題的な意味）のみではなく、主題構造や情報構造などのテキスト形成的メタ機能、及びモダリティーなどの対人的メタ機能にも影響する。英語から日本語へと翻訳する際に通説として知られている、名詞化された表現のなかに動詞を読み取り、節へとほどくという方略は、転位（transposition）（Vinay and Darbelnet, 1958/1977）や明示化仮説（Blum-Kulka, 1986/2004; Toury, 1995）にも関連する。さらに、テキスト・タイプやレジスターによって語彙密度が増減することを視座に入れた分析も必要であろう。このように翻訳者が関与する意思決定のプロセスや動機付けされた選択において、名詞化に関する諸相は、目標テキストを産出する際に各種のバリエーションを生み出す要因となる。これは、翻訳者がみずから行う選択ゆえの特性であり、社会文化的及び歴史的コンテキストに包摂された談話意味を理解し解釈する翻訳者の介在を可視化する。

翻訳と比較して即時性があり、時間的制約が厳しい通訳という訳出行為にまで視野を広げるならば、名詞化によって命題的意味を圧縮（compression）・凝縮（condensation）するという方略へと発展する可能性もある。通訳では翻訳と比較して時間的制約が厳しいので、暗意化方略（implication strategy）としての圧縮や凝縮が、明示化よりも重要であるとされる（Schjoldager, 1995）。この点では語彙文法資源を限られた時間内で経済的に具現化するものとして、名詞化方略を考察することができる。その意味で、文法的比喩は通訳研究の対象にもなる。

著者紹介：長沼美香子（NAGANUMA, Mikako）立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科准教授（特任）。日本通訳翻訳学会理事（翻訳研究分科会担当）。連絡先：mikako@rikkyo.ac.jp

【註】

1. 「アメリカ独立宣言」の翻訳を題材とした歴史的視座からの詳述は、山岡（2008）を参照されたい。

2. 英語原文 [ST] の節数と内容語数は下記のように数えた。

（凡例： || || 節の境界線、[[]] 節の埋め込み、___ 内容語）

When in the Course of human events it becomes necessary for one people to dissolve the political bands [[which have connected them with another.]] || and to assume among the powers of the earth, the separate and equal station [[to which the Laws of Nature and of Nature's God entitle them,]] || a decent respect to the opinions of mankind requires [[that they should declare the causes [[which impel them to the separation.]]]] （語彙密度：32÷3 = 10.7）

語彙密度の計算方法としては、ハリデー（Halliday, 1989, pp. 63-64）では内容語の総語数に対する割合を計算するが、本稿ではハリデー（Halliday, 1994, pp. 349-352）に従い、（内容語数÷節数）とする。

日本語訳文 [TT] の語彙密度の計算に関しては、その精度は今後の課題とする。本稿では「～において」は節に数えなかったが、「～にともなって」は「伴う」という動詞と見做して節の区切りとした。また「自然法」は、「自然」と「法」の2語の内容語として数えた。「直訳1」の例を以下に示すが、二つの「こと」によって複雑な埋め込み構造となっている。

人類の諸事件の経過において、[[[- 国民が他の国に結び付けられていた]] 政治的な 絆を解き放ち、[[自然 法と自然の神の法がその国民に付与した]] 分離した平等の地位を、地上の列強の間で占める]] ことがその国民にとって必要となる時、|| 人類の世論にたいする当然の配慮は、[[[- 彼らが分離せざるをえなかった]] 理由を宣言すべきであるという]] ことを要求する。 (語彙密度: 34÷2 = 17)

3. 「福沢訳」を以下のように分析すれば、前半は「一族ノ」から「建ル」までに四つの埋め込み節が並列的に包含されており、「時」で再統合されるという見方もできる。

[[人生已ムヲ得サルノ時運ニテ [[一族ノ人民他國ノ政治ヲ離レ]] [[物理天道ノ自然ニ從テ]] [[世界中ノ萬國ト同列シ]] [[別ニ一國ヲ建ル]]]] 時ニ至テハ || 其建國スル所以ノ原因ヲ述ヘ || 人心ヲ察シテ || 之ニ布告セサルヲ得ス (語彙密度: 24÷4 = 6)

「安西訳」の場合も同様であるが、このような見方をすると、前半の基本構造は「直訳」のパターンと類似した結果となり、柳父 (1979, pp. 43-44) の指摘とは齟齬をきたす。この点では「斎藤訳」においても、「場合」で再統合を要するという分析もできる。

【参考文献】

- 安西徹雄 (1996) 『翻訳英文法トレーニング・マニュアル』 バベル・プレス
- 安西徹雄 (2000) 『英語の発想』 筑摩書房
- Baker, M. (1993). Corpus linguistics and translation studies: Implications and applications. In M. Baker et al. (Eds.), *Text and technology: In honor of John Sinclair* (pp. 223-250). Amsterdam: John Benjamins.
- Blum-Kulka, S. (1986/2004). Shifts of cohesion and coherence in translation. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader, second edition* (pp. 290-305). London: Routledge.
- Chesterman, A., & Wagner, E. (2002). *Can theory help translators?* Manchester: St. Jerome.
- 江川泰一郎 (1964) 『英文法解説』金子書房
- Daneš, F. (1974). Functional sentence perspective and the organization of the text. In F. Daneš (Ed.), *Papers on functional sentence perspective* (pp. 106-128). Prague: Academia.
- Ghadessy, M. (Ed.) (1993). *Register analysis: Theory and practice*. London: Pinter.
- Halliday, M. A. K. (1985). *An introduction to functional grammar*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1989). *Spoken and written language*. Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar* (2nd ed.). London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. (2004). *The language of science*. London: Continuum.
- Halliday, M.A.K., McIntosh, A., & Stevens, P. (1964). *The linguistic sciences and language teaching*. London: Longman.

- Halliday, M. A. K., & Martin, J. R. (1993). *Writing science: Literacy and discursive power*. London: Falmer Press.
- Hatim B., & Munday, J. (2004). *Translation: An advanced resource book*. London: Routledge.
- 平子義雄 (1999) 『翻訳の原理』 大修館書店
- 福沢諭吉 (1866) 『西洋事情』 国立国会図書館近代デジタルライブラリー 2009年1月30日
http://kindai.ndl.go.jp/BIIimgFrame.php?JP_NUM=56000690&VOL_NUM=00002&KOMA=6&ITYPE=0 より情報取得.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店
- 伊藤和夫 (1979) 『英文法教室』 研究社
- Matthiessen, C. M. I. M. (1993). Register in the round: Diversity in a unified theory of register analysis. In M. Ghadessy (Ed.), *Register analysis: Theory and practice* (pp. 221-292). London: Pinter.
- 森岡健二 (1999) 『欧文訓読の研究: 欧文脈の形成』 明治書院
- 大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』 岩波書店
- Pöchhacker, F., & Shlesinger, M. (Eds.) (2002). *The reader of interpreting studies*. London: Routledge.
- サイデンステッカー, E. G.・安西徹雄 (1983) 『日本文の翻訳』 大修館書店
- サイード, E. W. (1998) 『知識人とは何か』(大橋洋一・訳) 平凡社 [原著: Said, E. W. (1994). *Representations of the intellectual: The 1993 Reith Lectures*. Vintage].
- 斎藤 真 (1981) 『アメリカ史の文脈』 岩波書店
- Schjoldager, A. (1995/2002). An exploratory study of translational norms in simultaneous interpreting: Methodological reflections. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The reader of interpreting studies* (pp. 301-311). London: Routledge.
- Steiner, E. (2002). Grammatical metaphor in translation – some methods for corpus-based investigations. In H. Hasselgård, S. Johansson, B. Behrens & C. Fabricius (Eds.), *Information structure in a cross-linguistic perspective* (pp. 213-228). Amsterdam: Rodopi.
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 外山滋比古 (1973/1987) 『日本語の論理』 中央公論新社
- Venuti, L. (1995/2008). *The translator's invisibility: A history of translation*. London: Routledge.
- Venuti, L. (Ed.) (2004). *The translation studies reader* (2nd ed.). London: Routledge.
- Vinay, J.-P., & Darbelnet, J. (1958/1977). *Stylistique compare du français et de l'anglais. Méthod de traduction*. Paris: Didier. Trans. J.C. Sager & M.-J. Hamel (1995) as *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 柳父章 (1979) 『比較日本語論』 日本翻訳家養成センター
- 安井稔 (2008) 『英語学の見える風景』 開拓社
- 山岡洋一 (2008) 「翻訳の歴史: アメリカ独立宣言の翻訳(1)」 『翻訳通信』第2期第79号。
2009年1月30日 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/> より情報取得.